

# 令和3年度経済学部学生チャレンジプロジェクト事業成果報告書

## 学び繋げるなえどこの輪プロジェクト

代表 二川 英実（経済学科 2年生）

### （1）目的と概要

本プロジェクトは、学びの場、交流の場を作ることを目的としている。学生同士が互いに刺激し合いながら地域や社会を学べる場づくりを推進した。また、学生同士だけでなく、取材や視察を通して、地域と学生を繋ぐ活動も積極的に実施した。それらの情報を発信することにより、学生の地域貢献意欲やモチベーションを高く維持すること、学生視点の地域・企業情報の提供という新たな枠組を生み出すことに貢献した。

具体的に今年度は、学びや繋がり場として、交流会、勉強会、取材、視察を実施した。

### （2）実施期間

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

### （3）成果の内容

#### 1) このプロジェクトの具体的な成果

今年度は主に5つの取り組みを行った。具体的には、学生の交流会「第二回つながり大作戦」、なえどこ内の勉強会「なえすた」、プロジェクトや地域に対する取材、上勝町へのオンライン視察、井上誠耕園への視察である。

まず、1つ目の学生の交流会「つながり大作戦」について述べる。これは、昨年度から企画していたイベントであり、今回で2回目の開催となる。開催目的は、将来を本気で語り合える人と学部・団体の壁を越えて語り合い、「自分」を見つめなおすきっかけの場をつくることである。オンラインで開催し、情報共有にはLINEのオープンチャットを用いたことで今後のイベントでの情報共有のツールの幅を広げた。内容としては、アイスブレイク、偏愛マップ、フリートークを設け、交流と自己の意思や行動を見つめなおすきっかけづくりを行った。

続いて、2つ目のなえどこ内の勉強会「なえすた」について述べる。「なえすた」とは、学生同士で地域に関する興味や知識を深めるため、地域や社会に関する問題や疑問などをメンバー自身が議題として取り上げて行う勉強会のことである。司会進行もメンバーが行い、勉強会後にはその議事録を「note」に搭載する等情報を発信した。今年度は、5回行い、それぞれ、「架空の町をつくろう」、「香川県の資源魅力を発見しよう」、「防災について考えよう！～災害の少ない香川だからこそ～」、「オリジナルnoteをつくろう」、「香川県庁乗っ取り」というテーマで実施した。第1回目の「架空の町をつくろう」では、人口

ピラミッドを元に、その町の状況を読み取り、必要な施設や条例を考案した。例えば高齢化が進んでいると読み取った町では、文化施設の家族割や孫割が案の1つとして挙げられた。続いて第2回の「香川県の資源魅力を発見しよう」では、香川県の魅力を挙げるだけでなく、それらを組み合わせて新たな魅力を想像することを目的とした。ここで出た案としては、教育と伝統工芸品、ことでんグループと瀬戸内国際、商店街と漂流郵便局などの組み合わせがあった。第3回は「防災について考えよう！～災害の少ない香川だからこそ～」というテーマで、香川だから取り入れられる・取り入れるべき災害対策について考えた。事前学習として、現在他地域で取り組まれている事例を調べ、共有した。なえどこ内で出た案としては、大学生が香川県ならではの災害や避難場所を知る機会の不足を問題視した香川大学内での防災キャンプ、防災グッズ常備率の向上を目的としたアーティストによる防災仕様のライブグッズ販売などがあった。第4回なえすたの「オリジナルnoteをつくろう」では、なえどこが新たな情報発信ツールとして使用しているnoteをテーマとして取り上げた。ここでは、注目を集める記事の共通点や工夫点を見つけ出し、今後の広報力を強めることを目的に話し合った。第5回の「香川県庁乗っ取り」では、条例を中心に事前学習、香川県に必要な条例や施設を話し合った。取り入れたい条例としては、学生の文化施設入場料無料化が案の1つとして挙げられた。これは、香川県の文化や歴史に触れる機会がないまま県外へ流出してしまう若者を少しでも減らそうと考えたからである。なえすた全体として、普段の生活では学ぶ機会の少ない題材を、同じ立場の学生と学びながら改善案を模索していく、なえどこの学びの場として大きな役割を果たしている。



図1. 第1回なえすたの様子



図2. 第3回なえすたの様子

3つ目は、プロジェクトや地域に対する取材である。これは、地域に関わる人に対して取材を行い、社会への関心・理解度を高めることを目的としている。今年度は、2020年度に学生チャレンジプロジェクト事業として採択された「Bonsai Girls Project」、「またたび」、「KAGAWA Maker」、「直島地域活性化プロジェクト」、「小豆島プロジェクト」、「さかいで沙弥島プロジェクト」、「TERASU」、「カマタマーレ讃岐との共同イベント」の8つのプロジェクトに対して取材を実施し、noteでその内容を発信した。なえどこ自身も対談形式で取材を行い、記事を作成した。また、企業取材として、朝日オリコミ四国へも取材させて

いただいた。朝日オリコミ四国は、報紙『ビジネス香川』を発行しており、香川県内でも地域・企業情報や情報発信に特化している企業である。朝日オリコミ四国への取材は広報や取材といったなえどこの今後の活動に大きな好影響を与えると考え、取材させていただいた。内容としては、取材の方法を伺い、その実践として、企画・編集、折込、即売、営業、を担当するそれぞれの部署の担当者にお話を伺った。



図3. 朝日オリコミ四国取材の様子

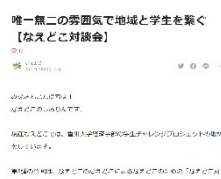


図4. なえどこ対談のnote記事

4つ目の上勝町へのオンライン視察では、パンゲア・フィールドにご協力いただき、「いろどり事業」、「ゼロ・ウェイスト」、「SDG s 未来都市への取組」について学んだ。上勝町は、徳島県のほぼ中央に位置する町で、「葉っぱビジネス」や、日本で初めてゼロ・ウェイスト宣言を行うなど、様々な取り組みを行っている。視察は、地域全体での取り組み方や重要視されているSDG s を事例に触れながら学ぶこと、質問を積極的に行うことを目的に行った。いろどり事業、ゼロ・ウェイスト宣言、SDG s 未来都市への取り組み、全てにおいて、地域の人々を巻き込み、誰一人取り残さない実施方法が重視されていた。この視察が、1, 2年生が中心となって初めての取組であったのだが、全員が積極的に質問でき、大変充実した視察となった。

最後に、井上誠耕園への視察について述べる。井上誠耕園は、小豆島にある農園で、「自然と大地の恵みに感謝を込めて誠意を持って大地を耕す園でありたい。」という願いからこの名がつけられた。地域に根差し、地域の魅力を世界に発信する企業の背景を知ることが目的として視察を行った。井上誠耕園は、6次産業に力を入れており、育てた作物を加工・ブランディングし、価値を決め、販売するすべての工程を自身で行っている。また、環境や自然の恵みに配慮し、食品ロスを削減する取り組みにも取り組んでいる。加えて、後継者問題や耕作放棄地増加問題に積極的に取り組んだり、雑木林の整備やその伐採した枝から肥料を作るなど、社会問題を解決しつつ事業を拡大する姿を学ぶことができた。

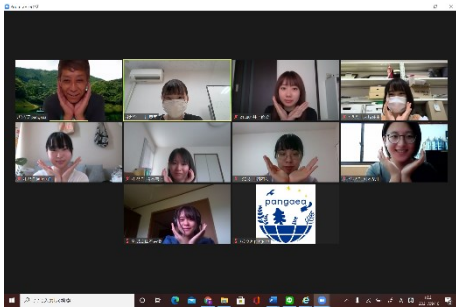


図5. 上勝町視察の様子



図6. 井上誠耕園視察の様子

## 2) このプロジェクトが大学や地域社会の活性化、学業の振興等に対してもたらした影響 あるいは効果

今年度は、学びと繋がりをテーマに、互いを刺激し合いながら学ぶ活動と、学生と学生、学生と地域を繋げる活動を積極的に行った。なえどこは、これまで繋がりに重きを置いており、これまでイベント開催などを通してそのノウハウを培ってきた。今年度は、新型コロナウイルスの影響でイベントを企画しにくい状況を踏まえ、その繋がりやそこで得られる学びを深めるため、学びも重視して活動を行った。

なえどこメンバーは、なえすたや視察、取材などの活動を通して知識、地域貢献意欲、企画力が向上した。これらをイベント企画・開催に活かすことで、今後もよりよい繋がりや学びの場を提供できると考えている。今年度は、noteによる情報発信にも力を入れたため、思いを言葉にしてまとめる力、読み手を意識した文章の組み立てる力なども身についたと感じる。

また、メンバーが学んだ経験や取材内容を学生や地域に向けて発信したことで、受手にも学びや学びのきっかけを提供できたと考える。加えて、プロジェクトの内容を取材し、発信したことから、なえどこをはじめとした香川大学の学生プロジェクトの存在を知ってもらうことに貢献したと考える。

### (4) プロジェクトから学んだこと

個人で学んだり行動したりするのが難しいことでも、団体で実行すれば行いやすくなることを学んだ。例えば、なえすたである。なえすたでは、題材を決め、司会者が進行しながらメンバー同士で話し合っ て学びを深めていくのだが、これを個人で行おうとすれば、ある程度知っているものを題材にしたり、発想が偏ったり、継続するのが難しくなる可能性がある。しかし、1人1人が役割に責任を持ち、全員が積極的に話し合っていくことで、多様な学びや考えを得られることを学んだ。

改善すべき点としては、繋がり場の場づくりにあまり力を入れられなかった点である。今年度中心に行ってきたなえすたは、メンバー内のイベントであったため、メンバー以外の人と意見を交わす機会とはならなかった。また、取材や、情報発信も一方的なものになっ

ていた可能性が高いことを反省している。取材では、なえどころがプロジェクトや企業の活動について一方的に質問したり記事にまとめていたため、その団体が一番伝えたいことを伺っていたのか不安が残っている。加えて、今年度、note を中心に行ってきた情報発信も、届けたい人や必要な人に届いていたのか、読み手はどのようなことを考えたのかわからないことが問題として挙げられる。繋がりとは、双方が関わり合っていることを指すと考えているため、現在進めている紙媒体での発信方法や、メンバー以外の学生も関わりやすいイベントの企画などを通して改善していく必要がある。

#### (5) 実施メンバー

代表	二川	英実	(経済学部 2 年)
副代表	鶴岡	紗也佳	(経済学部 3 年)
	岩本	春華	(経済学部 3 年)
	浮田	真佳	(経済学部 3 年)
	河本	栞里	(経済学部 3 年)
	服部	郁実	(経済学部 3 年)
	岡崎	萌生	(経済学部 1 年)
	末崎	芽生	(経済学部 1 年)
	松本	奈々	(経済学部 1 年)
	山本	美優	(経済学部 1 年)
	井上	優菜	(経済学部 1 年)
	和田	千穂	(経済学部 1 年)